The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	対人関係において認知された自己と親密度の関連 ：現代の大学生の様々な親密な関係
Author(s)	上出, 寛子; 大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 2008, 8, p. 51-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7376
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対人社会心理学研究, 8, 2008

対人関係において認知された自己と親密度の関連[1)]

—現代の大学生の様々な親密な関係—

上出寛子(大阪大学大学院人間科学研究科・日本学術振興会)
大坊郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究では、第 1 の目的として、現代の大学生に焦点を当て、様々な親密な関係がどのような他者との間に展開されているのかを明らかにした。さらに第 2 の目的として、それぞれの親密な関係においてどのように自己を表現し、認知していることが、当該の他者との親密性の深さに関連するのかを検討した。99 名の大学生を対象に、個人が関連する実在の様々な親密な他者を 5 名ずつ想起させ、各他者との関係の自由記述、各他者との親密度(岡田, 1999)、各他者と一緒にいる場合の自己認知(林, 1978; 個人的親しみやすさ、社会的望ましさ、活動性の 3 次元)について測定を行った。また、個人のパーソナリティとの関連についても考慮するため、基本的な行動の動機づけとして接近傾向と回避傾向についても回答を求めた(上出・大坊, 2005; 日本語版 BIS / BAS 尺度)。その結果、親密な関係の自由記述から、現代の大学生の親密な関係は、「小学校以前からの友人」、「中学校からの友人」、「高等学校からの友人」、「大学の友人」、「アルバイトの友人」、「恋愛関係」、「その他」の 7 つに分類された。この分類に基づき、各関係での自己認知得点と新密度の関連を検討した結果、概ねすべての関係において個人的親しみやすさが関連しており、冗談を言ったりユーモラスにふるまっていると認知していることが、ほとんどの親密な他者との間に感じる親密さを高めていた。「小学校以前からの友人」にのみ、社会的望ましさの自己認知得点が関連しており、交際期間が大学生にとっては極めて長く、将来的な付き合いの可能性のある他者に対する責任感や誠実さの重要性が示唆されていた。大学の友人においては、回避傾向のパーソナリティが親密度を高めており、大学で比較的最近友人となった他者との間には、新規なことや楽しいことを追及する接近傾向ではなく、できるだけ葛藤を避けたりコストやリスクを低減しようとする行動傾向が親密性に関連することが明らかになった。

キーワード: 親密な対人関係、大学生、自己認知、親密性

親密な関係の展開

われわれの関係する対人関係は様々である。毎日顔を合わす大学の友人、週末にしか会えない恋人、年に数えるほどしか会わない旧友などひとまとめにはできない関係を持っている。さらに、それぞれの他者とは親しくとも、大学の友人といる時の自分と、旧友といる時の自分が異なる様相を持っていることは自明である。またそのような交際期間の違いのみならず、たとえば恋人と友人が同じ交際期間であったとしても、その対人関係の質が異なることが明らかであり、そこで表現されるわたしも自然と違うものとなろう。

このような親密な対人関係や自己意識の関連については、関係の種類により親密性の質がどのように異なるのかという研究(久保, 1993)や、青年の自己概念と友人関係に注目した研究が行われている(岡田, 1995)。久保(1993)においては、男女、友人関係か恋愛関係かなどにより、接触頻度(時間)、共行動の多様性、相手からの影響の強さなどの行動側面が異なることなどが報告されており、同様に親密な他者であっても、実際にどのように付き合うのかは様々であることが示されている。相手が同様に個人にとって親密ではあっても、個人がその他者に対してどのようにふるまうのかは多様であることが示唆されているといえよう。

岡田(1995)は大学生の友人関係が、相手を配慮し自分がどう見られているのかを気遣う関係や、楽しい雰囲気でみんなと一緒にいることを志向する関係、心を打ち明けプライバシーに立ち入ることを回避する関係に分かれることを示し、それぞれの関係をとる個人の自己意識(内省をよくする私的自己意識、他者の目を気にする公的自己意識; 菅原, 1984)とそれぞれ特徴的な関連があることを示した。また和田(1996)は、様々な年代の同性の友人関係への期待に焦点を当て、中学生よりも高校生もしくは大学生の方がより内面的なものを求めることや、高校生より中学生の方が自らの自己概念のあいまいさから、自己開示を期待しやすいことなどを報告している。これらの結果は、年代により友人関係そのものに対する個人の抱く期待像が異なることや、かつ、大学生においては個人によっても友人関係についての考え方が異なり、このような対人関係は自己概念と密接に関連しあっていることを示すものである。

しかしながら、以上のように年代の異なる友人関係

に注目したり、友人関係や親密な関係の構造に注目した研究はあるものの、われわれが日常的に関わっている親密な対人関係にはどのような関係の種類があるのかという基礎的な類型の検討は行われていない。また、それらの関係においてどのように自己が表現されていることが、関係の適応性に寄与するのかについても十分には検討されていない。

したがって、本研究においては、現代の大学生に注目し、日常的に関わっている親密な対人関係の種類の基礎的な類型を特定することと、それぞれの関係において表現されている自己のあり方が関係の適応性に及ぼす影響について検討する。関係の適応性については、対人的な文脈における適応として、当該の親密な他者に対して個人が認知している親密性の程度に注目する。

親密性とは、久保(1993)や岡田(1995)などが示しているとおり、様々な要因から形成されている。会う頻度や、過ごす時間といった行動的側面や、生活に与える影響や考え方に与える影響など様々な側面により捉えられる。本研究では親密な対人関係において個人が当該他者との対人関係に感じている快さとしての親密性に注目する。具体的には親密な他者と、どの程度内面的な繋がりが強いと感じているかどうかを検討する。なぜならば、親密な他者とは他に代わりのいない、関係継続を期待する重要な他者である。このような他者との関係においては、将来的に持続性が期待できない表面的なつながりよりも、お互いの悩みや問題について忌憚なく相談しあえるような内面的な心理的つながりを強く感じているということは、当該他者との関係を良いものであると個人が認知していることと密接に関わることであり、対人関係の文脈における適応的な状態として考えることが可能であろう。

他者の全体像を判断する際には、認知者の過去の経験などから形成されたある程度安定している信念体系が働き、その信念体系に基づいて他者に関する情報を処理すると考えられている(暗黙裡のパーソナリティ観; Cronbach, 1955)。林(1978)は、この信念体系として次元性を強調した対人認知構造を提唱し、従来の対人認知の先行研究結果を整理した。対人認知次元の研究では、一般的に人々が持っていると思われるパーソナリティの認知次元の抽出を試みており、それぞれ刺激や評定の方法に違いが見られるものの(e.g., Norman, 1963; Rosenberg, Nelson, & Vivekananthan, 1968)、認知者は他者の具体的な個々の刺激により他者を判断するのではなく、自分に内在化する信念体系によって他者を体制化することが指摘されている。さらに、認知次元それ自体も、特定の他者に対するものではなく、一般的に他者を判断する際に利用されるものとして捉えられている。

これらの対人認知次元の考え方からすると、他者を捉える際に利用する認知次元はある程度個人にとって安定的で、普遍的に利用されることから、自己を認知する際にも利用されることが考えられる。よって、本研究では人が基本的に他者を判断する際に利用する認知次元を用いて、自己認知の様相を捉えることにより、対人関係内における自己のあり方を明確にし、さらにこれを関係の種類ごとに検討することにより、各関係での自己のあり方を調べる。

次に、青年の対人関係研究として、親密な関係を選択させる場合に半数以上が友人関係を選択し、次に恋愛関係、親戚関係、その他であることが示されている(久保, 1993)。青年(大学生)にとっての親密な対人関係には友人関係がもっとも占める割合が高いことがうかがえる。しかし、友人関係といっても最近知り合った友人と、昔からの旧友とは異なる存在であるし、最近知り合った友人でも大学の友人か、アルバイト先の友人であるのかという所属集団の違いによっても、自分のあり方は異なってくるであろう。従来、大学以前からの友人と大学入学後からの友人を比較した研究などがあるが(和田, 2001)、大学生が関わる対人関係の種類をさらに詳細に検討する余地がある。

岡田(1995)で示されたとおり、大学生の友人関係に関しては、他人を気遣うことを志向する人や、みんなと一緒に楽しく過す人、または、プライバシーに踏み込むことを回避することを念頭において関係を形成しようとする人など、対人関係そのものに対しての個人差が示唆されている。このことから、本研究では対人関係内での自己のあり方と当該他者との親密度との関連に注目するが、そもそも対人関係に対する個人の取り組み方や、関係そのものにどのような意識で関わっているのかという個人差を検討することも重要であろう。親密な対人関係は様々あり、それぞれの関係そのものによる自己の表現の特徴があったとしても、個人が基本的に対人関係に対してどのような志向性をもっているかが、お互いの内面的な関係の深さに影響を与えることは容易に考えられることである。

たとえば、対人関係において積極的であり対人的な刺激に敏感に反応する人は、お互いにとってよいことを見極め積極的に関わろうとし、自発的な関わり方により深い関係を維持することが考えられる。しかしながら、岡田(1995)が指摘するように、そもそも内面的なプライバシーに踏み込むことを嫌ったり、深く付き合うよりはみんなと一緒に楽しくいることを好むような人は、関係を悪化させることを出来るだけ回避しようとして、前者の

ような積極的な関わりではなく回避的な関わりによって関係を維持しようとすることが考えられる。そのような個人に安定する属性が、親密な他者である恋人や大学の友人、昔から続く旧友など様々な関係において同様に親密性に影響するのかを検討する必要があると考えられる。

このような人間の基本的な行動傾向は、接近と回避のシステムによって制御されており、Gray(1990)はそれぞれを行動活性化システムと行動抑制システムと呼んでいる。行動活性化システムは報酬・無罰・罰からの解放の信号によって活性化され、目的達成に向かう行動を開始、促進するという接近のシステムである。行動抑制システムは、罰・無報酬・新規性の信号によって活性化され、ネガティブな結果に至ると予測される行動を回避するという回避のシステムである。行動活性化システムと行動抑制システムはパーソナリティの 1 次元として捉えることができ、Carver & White(1994)は、Gray(1990)の理論に従ったこの 2 つのシステムの感受性を測定する尺度を開発している。彼らの作成した尺度は、行動活性化システムの部分は、強い欲求追求、報酬に対する反応、新規な報酬経験を探求する傾向の 3 つの因子からなり、行動抑制システムの部分は 1 つの因子で形成されている。本研究では、このような基本的な行動傾向のパーソナリティに注目し、対人関係に対して積極的に接近してポジティブな成果を求める接近傾向の特性や、ネガティブな結果を避けて消極的になりがちな回避傾向の特性との関連からも付加的に検討する。

以上のことから、本研究では大学生が関わる対人関係の種類を明確にし、それぞれ関係内での自己のあり方を基本的対人認知次元によって検討する。各対人関係におけるどのような自己のあり方が、各他者との親密な関係と関連しているのかを探索的に検討を行う。

方法

調査対象者

関西地区の男女大学生を対象に、質問紙調査を実施した。配布後、2 週間後に回収した。配布日時は 2005 年 4 月～5 月であった。質問紙対象者は全体で 99 名(平均年齢 20.42 歳, *SD* = 0.81)、男性 33 名(平均年齢 20.70 歳, *SD* = 1.07)、女性 65 名(平均年齢 20.28 歳, *SD* = 0.60)、不明 1 名であった。

質問紙の構成

様々な対人関係を抽出するため、できるだけ異なる対人関係(集団)にある最も親しい他者を具体的に想定してもらうよう求め(例; 恋人、大学の授業でしか会わない友人、サークルの友人、小学校からの友人など)、人数は調査対象者の負担を考慮し、5 名とした。親しい人が 5 つとも異なる関係にいない場合には、同じ関係が重複してよいので親しい人を 5 名想定するように指示した。想定した 5 人について、どのような関係であるかの自由記述、交際期間、親密度を測定した。

親密度の測定には、岡田(1999)の友人関係尺度の第一因子である“表面的―内面的関係”因子で、因子負荷量の高い順番に 5 項目(6 件法)を選定して使用した。これは、「友達に心を打ち明ける」や「友達とは、あたりさわりのない会話が中心だ(逆転項目)」など、友人との内面的な深い付き合いの強さに焦点当てた親密性を測定するものである。質問紙には、項目に表記されている「友達」の部分を「○○さん」に修正し、該当する各 5 名をそこに当てはめて各 5 名との間に感じている親密性についてそれぞれ回答を求めた。

想定した 5 人について、それぞれと自分が 2 人のみでいる場面を想定してもらい、その場面における自分はどのようであるのかを評定させた。具体的には、対人認知構造の基本的 3 次元とされている林(1978)の特性形容詞対を用いた(20 項目、7 件法)。

対人関係での接近傾向と回避傾向のパーソナリティを測定するため、上出・大坊(2005)の日本語版 BIS / BAS 尺度を使用した(20 項目、4 件法)。日本語版 BIS / BAS 尺度は、BIS(回避傾向)の 1 因子(7 項目)と、BAS(接近傾向)を構成する 3 因子(13 項目)に分かれている。

結果

親密度と自己認知の相関関係

調査対象者が回答した 5 名に対するそれぞれの親密度得点と、各 5 名の関係において対象者が回答した自己認知得点との相関関係を、認知次元別に算出した(Table 1)。その結果、どの次元においても正の相関関係が示された。特に、個人的親しみやすさと活動性次元における相関関係が強く、当該他者との関係において明るくユーモラスにふるまったり、積極的に相手に関わるようであれば、その他者との間に認知される親密度は高いということが示された。また、社会的望ましさは比較的相関関係が弱く、責任性や真面目さといった社会性の程度の高いふるまいは、全般的な親密な関係においては、あまり親密度に重要ではないことがうかがえる。

関係の種類の分類と親密度, 交際期間

各対象者が想定した 5 人との関係の自由記述(欠損を除く 492 記述)を、具体的な内容に基づき分類した。全記述を大学院生 1 名、大学教員 1 名で分類し、比較的記述数の少ないカテゴリは属する上位のカテゴリに

まとめ、最終的に 7 種類の対人関係に分類した。その結果、“小学校以前からの友人”、“中学校からの友人”、“高等学校からの友人”、“大学の友人”、“アルバイトの友人”、“恋愛関係(恋人、友達以上恋人未満、以前の交際者など)”、“その他”となった。

Table 1 親密度と自己認知の相関関係

自己認知の認知次元	親密度
個人的親しみやすさ	.37***
社会的望ましさ	.14**
活動性	.34***

***p < .001, **p < .01

親密度と交際期間で関係の種類別に差があるのかを調べるため、1 要因分散分析を行った(Table 2)。親密度に関しては“大学”・“アルバイト”が、“その他”を除く他のカテゴリよりも有意に低く(ps < .01)、接触頻度が最も高いであろう大学、アルバイトの友人は、旧友や恋人に比べると、悩み事を相談したり、深い付き合いをしようとは思っていないことが示された。交際期間に関しては、ほぼ、いずれのカテゴリ同士もそれぞれ有意差があり、特に、“小学校以前から”の友人は、どのカテゴリよりも交際期間が長い(ps < .01)。また、大学時代とアルバイトの友人では交際期間に差はなかった。

関係の種類ごとにおける自己認知と親密度

関係カテゴリごとに、相手との親密度に関連する要因を明らかにするため、各認知次元の自己認知得点とBIS、BAS 得点を説明変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った(Table 3)。ほぼすべてのカテゴリを通して、個人的親しみやすさが親密度と関連していることが示された。また、パーソナリティに注目すると、BAS が親密度に影響しているカテゴリが多く、望ましい成果を積極的に獲得しようとする傾向が、他者との親密度との高さと関連することが示された。

また、関係の種類ごとの自己認知と親密度の関連については、“アルバイト”で、個人的親しみやすさの影響が示されず、活動性の高さと、BAS が親密度に影響していた。つまり、アルバイトの関係では、個人の明るさやユーモアの高さよりも、活動に対する積極性が親密性に強く影響することが示された。また、“小学校以前から”の友人においては、個人的親しみやすさと BAS に加え、社会的望ましさが影響していた。社会的望ましさの影響は、このカテゴリのみの特徴といえよう。

“大学生の友人”においては、BIS が親密度に正の影響を与えていることが示されており、BIS が予測子として示されているのは“大学生の友人”における特徴的な結果であった。他のほとんどの親密な関係においては、積極的に接近していく行動傾向である BAS が親密性の深さと関連していたことに対して、大学生の友人という現在付き合いの頻繁な友人に関しては回避的な行動傾向が親密性と関連することが示されている。

Table 2 各関係の記述数，親密度，交際期間

説明変数	n	(%)	親密度 $M(SD)$	交際期間(月) $M(SD)$
小学校以前からの友人	63	13	4.70(1.05)	153.73(52.13)
中学校からの友人	37	8	4.53(1.02)	95.29(23.76)
高等学校からの友人	64	13	4.66(1.01)	66.72(43.12)
大学の友人	184	37	3.93(1.13)	23.70(9.57)
アルバイトの友人	65	13	3.79(1.12)	19.03(11.41)
恋愛関係	47	10	4.97(0.96)	18.76(14.86)
その他	32	7	4.39(1.00)	74.44(85.62)

考察

本研究においては、大学生を対象に、親密な対人関係にはどのような関係の種類があるのかを明らかにすることを第 1 の目的とした。さらに、そこで明らかにされた関係において認知される自己が、当該他者との間に感じる親密性に寄与するのかについて、対人関係における接近、回避の行動傾向のパーソナリティとの関連から基礎的知見を明らかにすることを目的とした。

その結果、大学生の親密な対人関係においては、“小学校以前からの友人”、“中学校からの友人”、“高等学校からの友人”、“大学の友人”、“アルバイトの友人”、“恋愛関係”(“その他”として分類される少数の記

Table 3 各関係において親密度に影響する要因

説明変数	β	R^2	df	F
小学校以前からの友人				
個人的親しみやすさ	0.24 †	0.37	(3,57)	11.14***
社会的望ましさ	0.42 **			
BAS	0.20 *			
中学校からの友人				
個人的親しみやすさ	0.32 †	0.25	(3,31)	3.47*
高等学校からの友人				
個人的親しみやすさ	0.46 **	0.29	(2,59)	11.96***
BAS	0.22 †			
大学の友人				
個人的親しみやすさ	0.32 **	0.26	(3,175)	20.52***
活動性	0.24 *			
BIS	0.16 *			
アルバイトの友人				
活動性	0.41 ***	0.27	(2,62)	11.43***
BAS	0.21 †			
恋愛関係				
個人的親しみやすさ	0.25 †	0.28	(3,41)	5.27**
BAS	0.24 †			
その他				
個人的親しみやすさ	0.26	0.19	(2,19)	3.44*

***p < .001, **p < .01, *p < .05, †p < .10

述もみられた)がカテゴリとして分類されることが示された。これまで、親密性そのものの質的な側面についての検討は行われていたが(久保, 1993; 岡田, 1995, 1999)、大学生が日常的に関連している親密な対人関係はどのような相手として記述、分類されうるのかといった類型については明らかではなかった。このような類型は親密な対人関係において表面的な分類であり、親密性の質といった心理要因を扱うわけではないものの、親密な他者として現代の大学生(青年)が認知しているカテゴリを明らかにした点で重要な知見といえよう。大学生は大学生の友人とのみ親しい関係を維持しているのではなく、これまでの自分の歴史に関わってきた、小学校以前の幼馴染から中学、高等学校といった交際期間の長い友人とも持続的に交際していることが明らかとなった。また、学校以外のアルバイトや恋愛関係といった分類も示されており、大学生の親密な対人関係のあり方が浮き彫りになったといえる。

これらの親密な対人関係の分類はある程度、明示的ともいえるが、久保(1993)と比較すると今回の結果の特徴がうかがえる。久保(1993)では、大学生に親密な関係を挙げさせたところ、友人関係が 64.0%、恋愛関係 22.5%、親類関係 9.5%、その他 4.0%となっており、親類関係が 1 割近くを占めている。本研究においては、わずかながらに親類関係(母やいとこ、兄弟姉妹)を挙げる回答者がいたものの、全体の記述数が極端に少ないことから、“その他”のカテゴリに含まれることとなった。これらのことから、およそ十数年の間に大学生の認知する親密な関係のカテゴリが，親類といったウチの関係よりも、友人や恋愛関係といったソトの付き合いにシフトしてきた可能性も考えられる。

各対人関係の種類における自己の表現のあり方と、接近、回避行動を表すパーソナリティ、これらと当該他者との親密性の関連を検討した結果、おおよその関係において他者と積極的に関わっていく接近傾向のパーソナリティが他者との親密性の深さに正の影響を与えていることが示された。報酬、つまりポジティブな結果について積極的に接近し獲得しようとする行動傾向は、親密な他者との深いつながりを促進するのにも寄与することがうかがえる。Baumeister & Leary(1995)が指摘するように、個人は社会の中でとり行われる他者との相互作用の中で well-being を獲得する。接近傾向のパーソナリティは積極的にポジティブな結果へと働きかける傾向であることから、ポジティブな方向性へと導きかなら他者との相互作用を行うことに積極的であり、その結果、当事者との親密性も深くなり、他者との間で well-being を獲得しやすいことが考えられる。

個人的親しみやすさについても同様にほとんどの関係の種類で、親密性に正の影響を及ぼしていた。親密な他者に対して、明るくふるまい親しみやすさを比較的強く表現することが、お互いの関係を深める自己表現であり、このことは親密な他者が様々であっても共通している結果といえる。しかし“アルバイトの友人”では個人的親しみやすさは親密性に影響せず、活動性が影響していた。アルバイトは社会的活動の場であり、冗談を言ったりふざけあうようなことはなく、活発に行動する活動性を表現する方が、対人関係において重要となることが考えられる。小学校以前、中学校時代、高等学校時代、大学の友人、恋人などにおいては、それぞれの関係がプライベートなものであると想定されるが、アルバイトにおいては社会的活動というある程度オフィシャルな場としての特殊性が、このような特徴的な結果を導いたと考えられよう。

一方“小学校以前からの友人”においては、社会的望ましさの次元における表現が親密性に正の影響を与えており、他のカテゴリにみられない特徴的な結果であった。“小学校以前からの友人”とは、これまでの様々な出会いの中でも、現在まで残っている希少な関係であり、非常に長い期間の交際を持続していると考えられる。そのような他者とは、お互い与えあう影響が強いであろうし、簡単に交際を断ち切ることも困難であろう。さらに、これまでと同様に、この先も深い関係を続けていくであろうことが予測される。このような他者に対しては、その場限りの態度のよさではなく、将来的にもよい関係が築けるという信頼性や、誠実性つまり、社会的望ましさの高さが求められるのではないだろうか。交際期間の長い親密な他者においては、責任や誠実性が必要となるという知見は、親密な対人関係が様々ある中で、付き合い方と関係の良好性について具体的な示唆を与える点で重要であると考えられる。

さらに、“大学生の友人”においては、BIS つまり、悪い結果に対して敏感に反応し、出来るだけそれらを回避しようとする行動傾向が、親密性に正の影響を与えていることが示された。BIS の影響がみられたのは“大学生の友人”のカテゴリのみであり、他のカテゴリでは示されなかった特徴的な結果である。大学生の友人関係において回避傾向のパーソナリティが親密性を促進する点については、いざこざを避け出来るだけ関係を悪化させないことに焦点を当てるような交際の仕方が、関係の維持に有用であることが考えられる。岡田(1995)では、大学生の友人関係では内面的な関わりを避け表面的な楽しさを追い求める傾向がしばしばあることが指摘されている。岡田(1995)は、友人相手を大学生として限定してはいないものの、このように表面的関係に留めようとする大学生同士の対人関係が関連す

ることが考えられる。

また、これらの結果について、今回のデータでは親族関係が多く示されなかった点とも関連する可能性が考えられる。社会的な流動性が近年急激に高まっていることからも、大学生の対人関係においても、親族関係との交際より、血縁関係にない様々な外部の他者と交際する機会や頻度が増えていると思われる。親密な他者として大学生が認知している他者であっても、回避傾向が親密性の高さと関連するということは、このような多種多様な対人関係において、出来るだけリスクを低減しながら交際していくという付き合い方が浮き彫りとなろう。小学校以前や、高等学校からの親友、または恋人といったように、比較的相手が特定的で安定していると考えられる関係では、気の置けない他者として、積極的に他者と関わろうとする接近傾向が親密さを深めるが、様々な他者が含まれるであろう大学の友人では、控え目に相手と付き合うことが相互の親密性に重要となると考えられる。

さらに、大学生の友人であるならば、他の関係と比較すればある程度最近に形成された対人関係とも考えられる。交際の期間がまだ浅いうちには、相手との関係におけるいざこざなどのネガティブな結果になることを出来るだけ避けることで、お互いの関係を深めていき、いずれ関係が安定し、忌憚なく相互作用できるようになった場合に、接近的な付き合い方が重要になるということも考えうる。しかしながら、この点については本研究のデータが横断的であることから、明確には言い切れないことではある。

まとめると、本研究においては、現代の大学生の親密な対人関係の分類と、それぞれの関係においてどのような自己を表現することが、親密性にどのように影響するのかについて検討を行った。大学生が日常的に関係する親密な対人関係とはどのようなものであり、それぞれの関係においてはどのように自己を表現することが、親密性に重要であるのかについて基礎的な知見を明らかにすることができた。今後や、関係の持続を考慮に入れた時系列的な検討をすることや、本研究で分類されたそれぞれの親密な関係の特徴に基づき、各関係で親密さを深め、適応的な関係を築いていくための知見を明らかにする余地があろう。

引用文献

Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.

Carver, C. S., & White, T. L. (1994). Behavioral inhibition, behavioral activation, and affective responses to impending reward and punishment: The BIS/BAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 319-333.

Cronbach, L. J. (1955). Processes affecting scores on "understanding of others" and "assumed similarity". *Psychological Bulletin*, 52, 177-193.

Gray, J. A. (1990). Brain systems that mediate both emotion and cognition. *Cognition and Emotion*, 4, 269-288.

林 文俊 (1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 25, 233-247.

上出寛子・大坊郁夫 (2005). 日本語版 BIS / BAS 尺度の作成 対人社会心理学研究, 5, 49-58.

久保真人 (1993). 行動特性からみた関係の親密さ―RCI の妥当性と限界― 実験社会心理学研究, 33, 1-10.

Norman, W. T. (1963). Toward an adequate taxonomy of personality attributes: Replicated factor structure in peer nomination personality rating. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 66, 574-583.

岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像―友人像に関する考察― 教育心理学研究, 43, 354-363.

岡田 努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.

Rosenberg, S., Nelson, C. E., & Vivekananthan, P. S. (1968). A multidimensional approach to the structure of personality impressions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 283-294.

菅原健介 (1984). 自己意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究, 55,184-188.

和田 実 (1996). 同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連 心理学研究, 67, 232-237.

和田 実 (2001). 性、物理的距離が新旧の同性友人関係に及ぼす影響 心理学研究, 72, 186-194.

註

1) 本研究は、2008 年度博士論文(大阪大学大学院人間科学研究科)の一部を加筆修正したものである。

Relational self-perception and intimacy:

Close relationships of university students in Japanese today

Hiroko KAMIDE (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University; Japan Society for the Promotion of Science*)
Ikuo DAIBO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

This study aimed to classify close relationships of university students in Japanese today and to investigate the relationships between intimacy and self-perception in each interpersonal relationship. 99 students described what kind of relationships with 5 close others in an open ended style. They also evaluated the degree of intimacy with each other (Okada, 1999) and self-perception when they were with each other(Hayashi, 1978; individual familiarity, social desirability, activeness). From the view of personality, a Japanese version of the BIS / BAS scale(Kamide & Daibo, 2005)was evaluated to assess two general motivational systems that underlay behavior and affect. Results showed that close interpersonal relationships of college students in Japanese today were classified into 7 categories of "before elementary school", "junior high school", "high school", "university", "a part-time job", "romantic relationships" and "other". We regressed self-perception on intimacy per 7 categories and found that self-perception of individual familiarity increased the degree of intimacy across most categories. This means that if they were telling jokes or entertaining close others with humor, they felt high degree of intimacy with the others. Self-perception of social desirability was related to intimacy just in "before elementary school", and this result suggested that they needed social desirability like conscience or earnestness to maintain good relationships with longtime friends that would be well-connected persons in years to come. In a category of "university", BIS (propensity of avoidance)increase the degree of intimacy, so they might maintain good relationships with relatively new friends to avoid conflicts or reduce in daily life risk.

Keywords: close relationships, university students, self-perception, intimacy.